The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語市場と物自体 : ピエール・ブルデューのディスクール論
Author(s)	西山, 哲郎
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 47-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語市場と物自体

――ピエール・ブルデューのディスクール論――

西山　哲郎

ある学問領域において信任を失いつつある概念図式が他の学問領域において根強く残っているという事態は、特に自然科学と社会科学との対比の中で後者の後進性を批判する形式において、しばしば指摘されることである。コミュニケーションの社会学の中でそうした事例を考えるならば、〔送り手―情報―受け手〕という実体論的な関係図式が挙げられることだろう。知識社会学はもとより、コミュニケーション論における内容分析や効果分析の多くは、これらの項のそれぞれを独立した実体として他と切り離した上で、再度それらを結合して社会的小宇宙を描き出す作業から成り立っているが、社会学という領域においてそのパースペクティブは依然として力を失いそうもない。その一方、批評の理論においては、同様の世界観を反映した図式、すなわち〔作者―作品―読者〕という図式は、言語学における構造主義の隆盛と平行して、作品の意味の歴史的変化に対する説明力の弱さなどから批判されるようになった。そこで代案が提出された訳だが、それらの図式がもつ共通点の一つは、フーコーが「だれが話そうとかまわないではないか」[1]と言い放ったように、それまで作品の意味を付与する上で特権的な位置を占めていた作者の（そして特にその意図の）存在を疑問に付すことにあった。しかし、それらが目指したのは、ニュー・クリティシズムが行ったような作品の絶対化ではなかった。いわゆる「新批評」は、作品の内包を実体化するという意味では、実際古い批評と何ら変わるところのないものであった。そうではなく、構造主義以降の代替群においては、乱暴にまとめてしまうと、〔作者―作品―読者〕という図式の各項に受け渡される実体としての意味という概念が放棄され、作者と読者がともに所属する言語共同体のもつ関係性をコンテクストとしてテクストを読解する作業が行われていたのだった。つまり、

そこでは作品や語そのものが意味するのではなく、我々（単数でないことに注意されたい）がそれらによって意味するのである。

ところで、こうした概念図式の転換は、先程述べた通り、解釈の歴史性に対する反省から生まれてきたものであったが、それがさらに解釈実践そのものとその動因への注目を要求するのはむしろ当然と言えるだろう。そうした傾向を代表する者としては、テリー・イーグルトンが挙げられる。最近公刊された著書の中で、イーグルトンは、「…イデオロギーは《言語》の問題というよりむしろ《ディスコース》の問題である。それは、特殊な効果の生産をねらって個別の人間主体間で行われる実際の言語使用にかかわっている。[2]」と述べている。この主張は、ある言明がイデオロギー的であるか否かの決定を言語内的な分析だけによって行うことは不可能であるとする点で、先の転換を共有するものである。その一例として、クローズド・ショップを採用する社会で、エスニック・マイノリティが組合から排除され、そしてその理由として「彼らがスト破りである」という命題が挙げられている場合を考えてみよう。この時彼らは、まさに組合から排除されているために、たとえスト破りをしてでも職を求めねばならない立場にあるのだが、その結果として組合からの排除が正当化されてしまうという悪循環に陥っている。この事例は自己成就的予言の一つとして有名であるが、作田啓一が指摘するように、他の事例とは意味合いを異にしている。[3]《銀行の支払い不能のうわさ》のような事例とそれが違っているのは、第一に、それが一回的なものではなく、反復的に、かつ広範囲に行われること（それによってその命題が客観的な性格を帯びること）が自己成就の条件となっていることである。つまり、エスニック・マイノリティに「スト破り」という定義が付与されるには、その定義の疑似ー普遍的な流通が確立される必要があるのだ。また、第二の相違は、それが、予言の解釈における一枚岩的な同意を必要とせず、その多元性を認められた上で起こりうることである。「スト破り」という予言に苦しめられるエスニック・マイノリティは、そのレッテルが自らの性向に由来するというエスニック・マジョリティの解釈に反対しているにもかかわらず、その予言に抵抗する中で逆にその解釈を補強し、予言を実現してしまっている。つまり、ここでは、ディス・コミュニケーションがある種のコミュニケーションを可能にしていると言えよう。まとめると、「彼らがスト破りである」という命題は、それが名指す「主体」とそれを受け入れる場の文脈に依存してイデオロギー性を発揮し、その惰性体がまたその後の「主体」と場を形作る契機となっている。この過程すべては共時と通時二つの軸を利用しながらもそれらを横断する形で行われており、したがって、ここでディスクール論と呼ぶ社会弁証法的なパースペクティブにおいて情報と「主体」の間に再び亀裂を見いだすことによってのみそれは分析可能となるだろう。

ところで、こうしたディスクール論を理解するためには、言葉の意味を、語る人の意図を反映した一種の物として、かつ言葉をその乗り物として取り扱う言語観がまず訂正される必要があると思われる。イーグルトンが述べているように、現実がすでに二枚舌である

ならば、世界を正確に「反映」できるか否かを問う真／偽規範の支持者は、先の例におけるエスニック・マジョリティが陥ったのと同じく、発言の行為遂行的イデオロギーの落とし穴を免れることはできない。この理由から、言語活動を分析対象とするすべての科学において、（カント的な定義における）物自体に対する命名としての言語観はもはや支持されえないのだ。そこで、本稿の第一節では、言語の意味作用を保証するものとして物自体が関与的［pertinent］ではないことを示そうと思う。しかし、だからといって、それは実体論的な図式を規約主義的な関係の網の目に解消すれば済むという主張を行おうというものではない。それがまさに（二枚舌の）現実を「反映」しているがゆえにイデオロギーとして働きうるのならば、関係の中で〔送り手－情報－受け手〕の各項が実体化される「反映化」の契機こそが問題にされなければならない。そしてそれは、先の例が示唆する所にしたがえば、（理想化された「伝統社会」にふさわしいような）ある一つの構造に対する信仰の自己同一的な力によってではなく、むしろ構造と構造のズレが生む軋轢の力の均衡によって実現されるのではないだろうか。そこから、第二節では、同じ名辞に対する定義を共有しない構造同士が出会う時、そのディス・コミュニケーションが何を生み出すかを論じるために、「隠喩」を取り上げようと思う。隠喩が言語行為論の文脈で論じられることが多いことからしても、それは情報と「主体」の間の亀裂を論じるにも役立つものとなるであろう。この二節をあわせて、ディスクールの実践を基礎づける指示対象の存在という問題について一応の決着をつけたい。最後に、第三節では、まず、社会実践の分析に時間的な広がりに対する考慮を欠かすことができないのはなぜかを論じることにしよう。[4] その後に、三節を総合する形で、ブルデューのディスクール論の提起するものを、その一端なりとも示したいと思う。

言語と資本主義

ところで、関係論的な枠組みの中で改めて指示対象の問題を考えると言えば、テル・ケル派のソシュール批判が思い起こされるかもしれない。例えば、ジャン＝ジョセフ・グーは、商品の価値と言語の意味をアナロジー的に重ね合わせて考え、ソシュールがシニフィアンとシニフィエの結合の恣意性を主張し、そこから指示対象を排除したことに対して批判を行っている。[5] 彼によれば、（身振りや信号などの）様々の記号の中で言語が特権的な地位を得ることは、様々の商品の中で貨幣が特権的な地位を得るのと全く同型的な運動であって、どちらにおいても（商品や記号をめぐる）具体労働が搾取され、隠蔽されていると言うのだ。この批判のおもしろい点は、先の「スト破り」の例でのエスニック・マジョリティに対してありうべき批判と共通性をもつことである。というのは、後者においても、マイノリティと「スト破り」という定義の結合が確定される過程で、解釈実践と社会実践の循環が隠蔽されており、そこにグーの批判が妥当すると思われるからだ。それゆえ、ここで経済と言語のアナロジーを採用するのは、ブルデュー自身が行っていることでもある以

上、一考に値する作業と言えるだろう。

ところで、このアナロジーの枠組みが採られた時に第一に問題となるのは、ソシュールが「土地の価値はそれのもたらすものに比例する」[6]ことを反例として経済学は言語学ほどの純粋な関係性をもたないと主張し、二つの学の出会いを流産させてしまっていることである。だが、このように、なされた弁別が経済学に対する彼の資本主義的偏見に支持されている以上、それには再考の必要がある。カール・ポランニーによれば、そもそも資本主義以前の社会において、土地は商品として固有の価値をもつことができず、土地とその価値は社会組織そのものの関数としてしか存在しなかった。「土地は封建的秩序の中枢的な要因であり、軍事、司法、行政、および政治のシステムの基盤であった。土地の地位［status］と機能は法的、慣習的な規則によってきめられていたのである。[7]」したがって、土地が交換価値として量的な換算を受けるようになるには、資本主義の成立を待たねばならなかった。マルクスによれば、すべての人間労働が等しい価値を付与され、交換において身分その他の属性的制約がすべて排除されて初めて、市場経済の基礎にある原子論的な「等価」交換の原理は意味をもちうるようになった。そして、「自己調整的市場」が確立される中で初めて、商品は交換価値において（ソシュールがはからずも表明したような）その固有性から導かれる自然さを獲得したのである。逆に、ポランニーの言う社会に埋め込まれた経済の中で、「商品」は再分配の埒外においてしか存在しえなかったし、その価値もいずれにせよ正当性の疑わしいものでしかなかった。それゆえ、商品に固有の価値というフェティシズムを理解するためには、価値の起源を問題にするのではなく、「構想力」をもちいて、価値形態の《論理上の》発展史を問わねばならないだろう。『資本論』においても、実際、それは次のように展開されている。

Ⅰ．単純な、個別的な、あるいは偶然的な価値形態。ここで、二つの商品の間に等価性が措定され、第一の商品は相対的価値として第二の商品の等価を表現している。「いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうるようになる[8]」ために、等価は相対的価値と等式で結ばれてこそ量的な価値を主張できる。しかし同じ理由から、相対的価値は名前として等価というからだを名づけているだけである。つまり、〔リンネル二〇エレ＝上着一着〕に意味があっても、〔リンネル二〇エレ＝リンネル二〇エレ〕は単なるトートロジーにすぎない。したがって、商品の質だけを問題にし等価を価値の起源とする重商主義者はもちろん、商品の交換関係だけを問題にし相対的価値を価値の起源とする自由主義者も間違っている。

Ⅱ．全体的な、あるいは展開された価値形態。ここで、ある一つの商品の価値が他の多くの商品の価値を表現する。その時、人間労働の平等が保証されているならば、その商品は抽象的な人間労働を反映するものとなる。しかしながら、特定の商品（例えばリンネル）が他の商品を代表するためには交換の範囲と頻度が限定される必要があるので、等式の前項の内包は指示対象である後項の連鎖の輪が

増えるごとに変化を被るものでしかない。

Ⅲ．一般的な価値形態。ここで、あらゆる商品はたった一つの商品で価値を表現している。この唯一特別の商品は、他の商品との交換において必ず経由されなければならないために、どの資本家にとってもそれが必要となってくる。これ以後、等式の前項であったもの〔リンネル〕が価値そのものとして求められ、等式は《転倒》されてしまう。しかし先のトートロジーを避けるために、それは他の商品から「自己疎外」しなければならない。この「自己疎外」によって、それは一般的等価として質的かつ量的な性格をもつようになる。それは交換の網の目から生じたものだが、これからは資本として交換を指導するものとなる。

Ⅳ．貨幣形態。一般的等価は極端に使用価値の小さい商品によって、例えば金、さらには紙幣によって、完成される。

この階梯において、形態ⅡからⅢの間に断絶があり、商品の価値は呪術的な不安定性を脱し、一般的等価という「実体」をもつようになる。一般的等価は、等式の《転倒》により、価値の名前であると同時にそのからだとなる。いいかえると、市場の確立とともに、一般的等価は表象不可能なものとしてすべての商品の背後につきまとうことになるのだ。しかしながら、一般的等価を生み出した等式の《転倒》は、観念論哲学の「逆立ち」に対する素朴な理解を越えるものである。この《転倒》は、交換の流れにおける〔商品－資本－商品〕から〔資本－商品－資本〕への二度目の《転倒》が行われた後では、むしろ現実に即したものとなっている。それゆえ、商品の背後にある不可視のものから価値を演繹する観念論を批判するだけでは不十分であって、不可視のものを商品という物の交換から帰納しようとする素朴唯物論者も批判されなければならない。『資本論』が示唆するところによれば、商品とその価値は、（どちらがどちらに当たるにせよ）物自体と記号の関係にあるのではない。もしそうなら、それらは偶発的で恣意的な関係しかもちえないだろう。様々の商品の差異は、質的でそれゆえ絶対的な差異である限り、商品フェティシズムの原動力とはなりえない。それらは、等式で結ばれることで質的な差異を抹消された上で、再び、量的な、つまり比較可能で交換可能な差異として関係づけられる必要があった。そして、この同化と異化の複合作業は、ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で分析したように、手段であった資本の追求が目的化される中で、それ自体の忘却によって完成されるだろう。いいかえると、構造化の契機は、通常の意味での時空構成から排除され、神話的時間構成の中で無意識化されてこそ、交換の一部となりうるのだ。それゆえ、商品とその価値は《転倒された現実》を基盤として生まれ、同時にその一部を構成する相関項なのであり、その限りにおいて必然的な結びつきをもっているのである。

このように理解された価値理論を再び言語において展開してみることにしよう。まず、二重の《転倒》の後、資本と化した商品は、価値の抽象化された実体を担うために、ある意味で「使用」価値をもちうるものである。実際、単なる尺度として実体をもたない示差性としての交換価値は、ある／あらぬというデカルト的二元論の意

味での存在としては、資本主義社会においてその場所を得たことはない。そしてそれは、言語学において、ラングが、構造主義によって分析的に見いだされるまで、パロールの中にその場所を得たことがないのと同じことなのである。交換価値は、常に使用価値として《誤認》され、それゆえ「主体」によって欲求される限りにおいて、実践の中で出来事としてアド・ホックに達成されるものである。それが（恣意的でさえある）形式として反省的思考の中に浮かび上がってくるのは、資本としてのある種のスタイルの流通がその量においても頻度においても確立された後初めて行われることなのであり、つまりは〔送り手－情報－受け手〕が〔情報－媒介者－情報〕という図式に取って代わられるのが適切な状態になってからのことなのである。それゆえ、形式的には言語の伝達機能のみを果たすため「本質的に」抽象化されたものである交換価値は、すでに確立された情報流通の結果ではあっても原因ではない。もちろん、それがさらなる資本操作としての言語行為を導いているのは確かであるが、それとても、それが交換の起源だからなのではなく、既に成立した循環の結節点として欲望を喚起するからなのである。それゆえ、逆に言うと、時に言語の「真性の」使用価値として称揚されるそれ自体としての言葉の使用も、それがもし何らかの意味作用をもつとするならば、それはこの交換価値の《誤認的》使用の中で、それと矛盾するからなのであって、つまりその正当とされる使用を否認するからなのである。ここから、もしグーが、その批判者の言うように、コミュニケーションの道具としての言葉とそれ自体が目的である詩的な言葉との間に理想的な断絶を思い描き、後者に手放しとも言える期待を寄せていたのならば、それはあやまちである。[9] そうした楽観主義には、ソシュールの慎重な注釈者が行ったような、パロールにおける形相の実質化と実質の形相化との理想主義的弁別による再批判を防ぐものは何もない。[10] が、むろん、こうした折衷主義的退行に同意する訳には行かない。そのためには言語の使用価値に対するフェティシズムを、あるいはその意味の内包に対する一切の固着を捨て去らねばならないだろう。言語の行為遂行的な力は、それ自体を目的とする言葉の使用の中だけではなく、（あたかも）事実確認的（に見える）発言の中にも存在している。むしろ後者においてこそ言語はそれ固有の物質性を発揮しえていると考えるべきであろう。それゆえ言語と指示対象を論じるに当たって問題になるのは、伝達とパフォーマンスの弁別なのではなく、正当とされる《誤認》と不当とされる《誤認》との差異であり、（「死んだ」と言うよりは）慣習化された隠喩と生きている隠喩との差異なのである。

隠喩と存在

リクールの『生きた隠喩』に代表されるように、隠喩をめぐる議論においては、構造主義によって捨象されてしまう指示対象の存在がしばしば問題にされてきた。そしてそこには、パロールとラングのプラトニズム的な弁別を乗り越え、ランガージュにおいて意味の存在と存在の意味を同時に把握する努力が感じられる。それに比す

ると、言語解釈において言葉と物の対応を当てにしないという構造主義の企図が、しばしば代替としての構造ないし解釈コードに対して（ある言語共同体の中だけでとはいえ）静態的で一枚岩的な性格を付与してしまうことに終わるのは、テル・ケル派ならずとも受け入れられるものではなかろう。実際、静態的な構造主義は、言語命名論の支持する情報の実体性を規約主義的なものに取り替えただけであって、〔送り手－情報－受け手〕という図式の罠を免れてはいない。それは相変わらず送り手から受け手に手渡される「物」としての意味概念に捕らわれているのだ。それに対して、隠喩の多義性は、解釈コードの自己同一的な性格を頭から否定してしまう点において、強力な意義申し立てとなっている。しかし、その一方で、隠喩は我々に再び物自体やそのイメージの現前を仮定するよう教唆するものでもある。例えば「リチャードはライオンである」と言う時のように、それが範列的秩序に対する違反から意味作用を引き出しているのを目にすると、我々は指示対象《リチャード》と指示対象《ライオン》という二つの物自体の本性に由来する類似性を考えたくなるのだ。反対に、これが「リチャードは勇敢である」という本義的な文であれば、《リチャード》を単なる名辞と見なすことに何の支障もないだろう。しかしながら、「リチャードはライオンである」という文において《リチャード》と《ライオン》を単なる名辞と見なすなら、両者の結びつきのきっかけとなる類似性をそこに見いだすことは不可能となる。つまり、そこから勇敢さという意味を導くものは何もないように思われるのだ。ならば、構造主義が言語理解から物自体を排除したのは間違っていたのだろうか。実際、隠喩表現において、言葉と物は再び異質なものとして出会っているのだろうか。

マックス・ブラックの古典的な整理によれば、隠喩理論において指示対象同士の類似性からアプローチする説明は隠喩比較説［comparison view of metaphor］と呼ばれている[11]。それに従えば、隠喩とは隠れた類比または類似を提示するものだと考えられる。つまり、それは直喩の省略として、二つの指示対象の類似性に依存した意味作用を行っているというのだ。しかし、この説はブラック自身によって相互作用説［interaction view］に劣るものとされている。なぜなら、彼によれば、「隠喩は予め存在する類似性を定式化するというより、類似性を作り出す[12]」からである。そしてこの主張を一つの主題という絵の上にフィルターをかけるもう一つの主題というゲシュタルトの隠喩によって説明している。例えば、戦争をチェスの用語で描写すると、それは戦闘のある側面を選択するだけでなく、他の媒体によっては決して見えなかったと思われる側面を見せているのだ。それゆえ、隠喩はその表現のズレ自体が意味をもつ表現であるということになり、それを本義的表現に翻訳することは不可能になる。反対に、比較説に従うなら、隠喩は二つの指示対象の内包する類似性を指摘するだけであるから、それを本義的表現として置きかえることは常に可能であろう。しかし、隠喩は本義的な理解に背馳するがゆえに隠喩として認識されるのであって、それを本義的表現に読みかえてしまうことは、その存在自体を抹消することには

かならない。相手を中傷するため「彼はまったく勤勉家だ」などと言う反語法と同様に、隠喩はその違反をして何かを行わしめる表現なのだ。それゆえ、隠喩に関する多くの理論家が、隠喩は発言の意味に対する何らかの期待を裏切るものだと定義していることは尊重されるべきである。「隠喩の解釈とは、有意性を欠く陳述にそれを付与する過程にほかならない。そのために言語主体はそのつど《特別に》あるいは《アド・ホックに》、目的にかなう含意を手に入れるために必要な演繹前提を、自ら《設け》[establish]ねばならないのである。[13]」

しかしながら、本義的表現についても、「AはBである」という表現で単純に両者が同じ物の二つの側面を語っていると考えることはできない。逆説的な言い方をすれば、それはAとBの指す《もの》が違うものであるからこそ意味をもつ言明である。このことは、教室という文脈においてのみ意味をもつトートロジー的表現を考えてみればすぐにわかることだろう。例えば、我々が「ものは物体である」などという表現に奇異な感触を覚えるのは、そこに一つの主題しか見いだすことができないからなのである。実際、日常において我々が頻繁に耳にする等式的な表現が言わずもがなのものでないのは、そうした文脈では本義的表現においても二つの主題の出会いがあるからであろう。そこでも、二つの名辞の間にはすでにズレがあり、ただそれらを結ぶ跳躍が常に隠蔽されているだけなのだ。このことは隠喩と本義的表現の境界例である「人間は狼である」を考えてみるとよく分かる。この表現を「人間は凶暴で貪欲で、絶えず闘争し、腐肉を食らっている」などという本義的表現に置きかえるのは容易なことだろう。しかし、ここで注目しなければいけないのは、この解釈が、動物学の進歩が実際の狼は「凶暴で貪欲で、絶えず闘争し、腐肉を食らって」などいないことを証明し、その証明を我々が承知しているにもかかわらず、行われうることである。もちろん、この表現の中の《狼》という名辞を動物学上の狼とは同音異義のものとして理解することは可能であろう。しかしそうなると、「人間は狼である」が本義的表現であることを否定するものは何もなくなってしまう。なぜなら、前節でも述べたように、本義的表現は物自体との正しい対応を保っているがゆえに本義的と呼ばれるのではなく、それがある一連の実践と正しい応答を保っているがゆえにそう呼ばれるのだから。ならば、名辞《狼》を名辞《人間》と繋辞で結ぶという発話行為は、ある言語共同体の歴史の中で誹謗という実践の一部となってきた限りにおいて、本義的表現と見なされるべきであろう。実際、記号の本義的意味作用というものを教室の文脈でしか捕らえず、その他の文脈を偏向したものとして断罪することは、学者の論理中心主義の現れでしかない。しかし、その時さらに注目されるべきことは、この表現が本義的性格を獲得しうるためには、意味作用の他の可能性に目をつぶるという条件が必要であったことである。つまり、「人間は狼である」という表現の解釈において、動物学という実践に特有の言語場で本義とされる《狼》の意味が語りえないものとされざるをえなかったように、他の言語場においては可能であろう意味を語りえないものとすることこそが、まさにあ

る表現の本義性を生み出しているのである。そのため、あらゆるディスクールのスタイルは、それが語りうるものと語りえないものとを同時に枠づけている。例えば、ブルデューによれば、哲学における抽象化されたスタイルは、異なるジャンルにおいてなら語りうる思考を明示的に語ることを許さない。[14] 昨今話題になったハイデガーの選良思想についても、彼自身の哲学以外のテクストにおいてそれがあからさまに表現されることがある一方、その本業において明確な形をとらないのは、そこに隠蔽や暗号が存在するからではない。実際、ジャンルになじまない思想は、その（哲学の）スタイルを尊重することだけによって、何ら意図的な工作なしに《表ー現》から排除することができる。ディスクールの所属するジャンルのスタイルは、そのジャンルに適さない思考を「否認」の形式においてしか表現させないのだ。したがって、「否認」された思想が、そのイデオロギー的機能を発揮できるのは、作者と共通の社会実践を経験している読者が暗示された意味作用を再創造するときだけに限られており、それゆえそれは「イデオロギーの終焉」以降の最も強力なイデオロギーとなっている。

ところで、こうした本義的表現の抑圧的性格を隠喩的表現が免れていると信じる理由は存在しない。なぜなら、詩的文脈を離れれば、隠喩が意味創造の無限の可能性をもたないのは明らかなのだから。日常の文脈においては、隠喩が無からの創造として単独で作用することはありえず、それは、リクールが「ルート・メタファー」の概念を引用しつつ述べたように、複数の隠喩が網の目を形成する場合にのみ働きうるのだ。[15] そして、我々の生活が無限のバリエーションをもたない以上、「ルート・メタファー」の数も無限ではありえないだろう。ならば、隠喩の生成にも様々の慣習的規制が存在することが予測される。例えば、レイコフとジョンソンによれば、現代のアメリカにおいては、議論が戦争にたとえられることはあっても、ダンスにたとえられることはほとんどない。つまり、アメリカ的文脈において、議論の言語場と戦争の言語場との親和性は現実のものだが、ダンスの言語場との親和性は机上の空論でしかないのだ。そしてさらに、「建築」という隠喩の一つの体系の中を見ても、ありうる表現のバリエーションには制限が課せられていると彼らは言う。「《理論》という概念に構造を与えるために使われている《建造物》の部分は基礎と外郭だけであって、屋根、部屋、階段、廊下といった部分は、《理論》という概念に構造を与える部分としては使われてはいない。[16]」アメリカの生活において、論述にかかわる実践は「基礎」とか「外郭」といった語彙の使用において建築にかかわる実践と類似性をもつが、「屋根」とか「廊下」といった語彙の使用において両者は類似性をもたないのだ。こうして、暗黙知の次元における様々の類似性を目当てに隠喩は活用されている。したがって、隠喩の意味作用が指示対象間の類似性に依存するという見方は、ここで言う指示対象を物自体としてではなく、ランガージュとしての性格を常に兼ね備えた（ということは、そこにはパロールだけではなく、身体図式というラングの介入が避けられないということだが）実践の効果として考える立場において肯定されるだろう。しか

し、こう言ったからといって、表現の意味と実践の様態が一致することが理解の条件であると主張する訳ではない。隠喩においては、類似性が二つの主題を支える一連の実践の間を取り持った上で、再びそれらの差異が強調されない限り意味作用は行われない。そして、この結合と切断を同時に行うことこそ、単なるトートロジーでない本義的表現においても見いだされたのだった。それゆえ、言語表現の解釈は、本義的表現においても隠喩的表現においても、常に「家族的類似」を語りうるとおり、多様であると同時に決して無限ではない。いずれにおいても、名辞の背景にある構造の組み合わせの親和性の大小が、本義的と呼ばれる表現をも含んだ広義の隠喩の理解を導くものとなっているのだ。

以上の理解をもとに、指示対象とは何かという問いにひとまずの回答を与えることしよう。まず、それは、ニュートン的な絶対時空のいずこかに定位する自己同一的な物自体ではなく（あるいはその現前としてのセンス・データでもなく）、構造と構造のズレが生み出す効果だと言えよう。それゆえ、それは文脈に依存したその場限りの創造物（エスノメソドロジー的に言えば「機会的構成物」）ではあるが、この文脈自体が実践の慣性力によって反復、再現されるために、客観的な、というよりむしろ社会的な存在の持続を保証されているものである。ところが、この実践の慣性力自体は、逆に、指示対象の存在の事実性によって生み出されているのだ。ようするに、実践と言語とは互いに距離を保ちながら、互いに保証しあって、指示対象の存在を支えている。それらは決して重なり合わないことで、互いを「反映」することに成功している。逆に、もしも言語と実践が時空において完全に一致するならば、一方が他方を導く運動は止むことになり、双方の死につながるだろう。ショシャナ・フェルマンの言を借りれば、「たしかに、対象言及的なるものは、対話の物質的な現実に言及する。すなわち、発話行為［énonciation］の現実（「分析言説」の現実、及び言語の「パフォーマンス」の現実――言及対象は文字どおりその発話行為の行為そのものである）に言及する。そうであるのは、発話行為というものがいつでも、不可避的に、その発話にたいして過剰であるからなのだ。[17]」考えてみれば当たり前の話なのだが、もし言葉が現実を忠実に反映しようとするだけのものならば、先の本義的表現の例に見られた通り、それは常に余計なものである。実際、《現実》の反映を目指して、限りなく透明であろうとするビジネスや法律の言葉が（そして科学の言葉も）、それでもなお実践の中にその存在を消し去りえないのは、言葉と物を（絶対的な差異化というよりも）距離化することで両者の存在を際立たせるために他ならない。しかしながら、逆説的にも、言語の実践に対するこの過剰において、《反映》という規範によって常に一方が他方に抑圧されることで、意味と指示対象は再び混同されるのであり、そして、この混同が意味に唯物論的に保証された内容を与え、指示対象に観念論的に永続する形式を与えている。こうした意味においてこそ、「言語はそれ自身、それが言及するものの部分をなしている」のだ。

場[champ]と象徴権力

さて、ここで第一節を振り返ってみよう。それによれば、言語の価値は、それを核とする交易活動自体が保証するものであって、決して外部の審級によって保証されるものではないということであった。それゆえ、そこにおいては、いわゆる唯物論者たちが主張するような経済的支配関係の単純な投影を認めることができなかった。（したがって、言語における伝達機能の強調のみがイデオロギーとして告発されることも認められなかった。）そこから問題になるのは、教育市場を背景にして言語ないしそのスタイルを資本として分析することが、ブルデューに限らず広く行われているにもかかわらず、言語資本を最終的にはかならず経済資本に転換されるものとして、つまり結局は同じものとして取り扱っていることである。[18] もちろん、ブルデューにとっても両者は転換可能であり、かつそれらの転換は必然的に要求されているのだが、彼によれば、それらは互いに距離を取ることで初めて他方に影響を及ぼしうるものなのである。実際、言語資本が経済資本と同じものであるならば、いいかえると、結局「金で買える」ものでしかないのならば、後者が前者に影響を与えるとしても、前者は後者に対して影響を与えることはできないだろう。逆に、もしそうなら、言語資本や文化資本をめぐる不平等は、容易に認識でき、かつ容易に是正できるものであっただろう。実際、魅惑的な「誇示的消費」の理論を支持する者が「否認」してしまいがちなのは、その主張が成り金趣味の批判を行いながら、裏返せば、卓越化のもう一つの手段である教養（つまり、金に換算できない趣味の良さ）に対する価値づけを強化し、経済市場からの教育市場の自律を支えていることである。[19] 言語を資本とする市場のように、経済審級から相対的に自律した市場のことをブルデューは“champ[field, 場]”と呼んでいるが、経済という審級は、確かに、我々がその議論の言及対象を物自体として考えている限りは、上部構造／下部構造という二元論的な図式でもって、避けがたい実定性でもって“champ”に優越性を主張しうるだろう。しかし、前節までにおいて、不動で明確な輪郭をもった物自体という概念が議論の対象から退けられた今となっては、それ自体をしばしば重要なものとなりうる“champ”の一つとして、しかしながら、言語や文化の“champ”を根拠づけるとは言えないものとして考える必要があるだろう。いいかえると、それはただ様々の“champ”が、錯綜したヘゲモニー闘争の中で結果として相互に存在を保証しあう政治の、重要であるとはいえ、一参加者にすぎないのである。

こうして、フェティシズムの中に唯一の貨幣しか見いだせない「モノ・カルチュア」の経済学が疑問に付されたならば、言語における言語資本の実体化の過程についても、場における実践の内的な論理から見いだすことができるようになるだろう。ブルデューによれば、それは文化資本として次の三つの様態を経過するものである。[20] まず一つ目の、場の過去の要請に応じて獲得され場の現在の尺度に従って計量される「身体化された様態」は、言語をつかさどる精神や肉

体の様々の能力であり、そこまで明確ではないとしても長期間持続する傾向を含んでいる。次に「客観化された様態」は「身体化された様態」が操作しうるものという意味での文化財、すなわち書かれたり語られたりして市場のサンクションを受ける物となった作品である。そして最後に、「制度化された様態」は場が用意する様々のタイトルによって「身体化された様態」が制度化されたものである。しかし、これらの資本が物化されているのは確かだが、何度も言うように、物であると言うことは物自体であると言うことではなく、それらが物であるという主張はその存在についての1／0的同意ないし拒絶を要求する類いのものではない。すなわち、スタイルや能力、作品やタイトルの正統性は、それらをめぐる戦いの中で勝敗を判定するためのルールとして尊重されているのであって、無批判の信仰によって守られているものではないのだ。逆に言えば、ゲームのルールの常としてそれらは不断に変化の可能性をはらんでいる。外部に審級をもたないということは、互いが互いの批評家となる以外に評価を決めるすべはないということであり、また、資本のこれら三つの様態も、共時的な押しつけないし合意によってではなく、時間差を利用して互いが互いを根拠づけることでしか存在しえないということを意味している。そうでなければ、その時のルールに関して不利な立場の者がなぜルールを受け入れるのかが理解できないものとなるし、また、様態間の移行に必ず転換作業を要するために様々のタイトルの獲得が《個人的な》達成として誤認されるということもありえなくなってしまうだろう。そして、文化生産の場に常のものとなっているモードの永久革命についても、それが「身体化された様態」に関して特に恵まれた場の新入が「制度化された様態」に恵まれた場の古参の支配者に対して自分たちに有利なようにルールの変更を迫るために起こることを見落とすため、そこに何かの奇跡や、あるいはさらにまずいことに、進化論的な歴史の必然しか見なくなってしまうのだ。しかしながら、物理学において相対性理論が主張したように、社会学においても、その時間軸を構成する疎隔化の運動を問題にしない限り場という空間を考えることはできない。そして、ブルデューが一九八九年の日本講演で述べたように、場の歴史を作るのは「所有者と所有志願者、あるいはちょうどボクシングの試合でいうように、タイトル（作家、哲学者、学者など）の保持者と彼らに対する挑戦者との闘争」[21]なのである。

しかし、こうしたヘゲモニー闘争は、その闘争を可能にする場の論理に則って行われている以上、場自体の破壊に向かうことは決してない。正統性に関する「真の」定義を争う闘争に参加する者は、それゆえに、その場の外部の審級との境界をめぐる争いに対しては共同戦線を結んでいることになる。[22]特に、正統の中でもとりわけ正統な文化産物は、経済的な審級からの自律性を誇示することにその正統性の根拠をもっている。したがって、前衛を争うことのできる競争＝共犯者たちは、言語ないし文化資本に最も恵まれた者たちであると同時にしばしば経済資本に恵まれないがゆえに、後者の混入を拒むという点では容易に利益が一致するのである。そして結局、この闘争で疑われるのは資本の一定義であって、資本そのものでは

ない。そこで追求されるのは資本の「真の」定義であり、それゆえ、この追求を駆動するのはまたしても真／偽規範である。モードの永久革命は、ノーサイドの笛が鳴る前にハンドリングを正規化したラグビーがフット・ボールであり続けたように、それが決して完結せず、再生産の循環構造を明示化しないことによって、逆に場の自己同一性を保っているのである。

では、こうした場に対して資本の保有量において不利な立場の者にはどういう選択肢があるのだろうか。一つには、その資本の増大を目指してきまじめな研鑽を積むやり方があるだろう。しかし、このやり方はそれを支えるエートスゆえの限界をもっている。前節で述べたように、我々の言語表現がすべからく隠喩的であるなら、本義的とされる表現をなぞるだけではその能力は最低限の評価しか受けない。つまり、あらゆる教育の場面で推奨されるきまじめな「まねび」は、それが暗黙のうちに表現の本義性を前提するために、学習者を決して最高の地位に導きはしないのだ。ところが、文化資本の既得者の卓越性は、その保有量の多寡によってという以上に、その資本と戯れる能力によって保証されている。実際、教育の現場でブルデューが行った調査においても、教師と類似した出身環境において生徒が体で覚えた性向によってしか是認されえない類いの表現の飛躍ほど、すなわち知識として学習しうるものではない適切さを保った偏差による隠喩表現ほど高く評価されていた。[23] その一方で、豊富な知識に裏づけられていても、偏差の少ない硬直した表現は低い評価しか受けることがなかったのだ。それゆえ、教科書に出てくる本義的表現以外の知識を体得していない者は、きまじめに学習すればするほど天才／秀才という古典的な二分法の罠に落ち込むはめになる。しかし、このことは、《才能》などといった本質に由来する起源によってではなく、場の構造効果によって説明されなければならないのだ。そうすれば、隠れた才能の伝説を鼓舞するような絵画芸術における素朴派の成功も、その場の構造がアンリ・ルソーのアナクロニックな作品から本義性との戯れに必要な偏差をうまく引き出したというところに帰着するだろう。

次にありうる選択肢は、場とその資本に背を向け、日常会話に用いられる地方語を本来的な言語として称揚するやり方であろう。しかし、このポピュリズム的選択によっても、実際には場の支配を逃れられる訳ではない。『言語起源論』を著したジャン＝ジャック・ルソーの時代から、マイナーな言語が自然／文化や理性／感情などの二項対立によって正統なスタイルとの対比の下で語られるのは常であるが、それはとりもなおさず、「方言」に対する再評価が正統なスタイルとの偏差に依存せざるをえないことを示している。しかも、民衆言語の支持者たちは、その再評価においてかえって彼我の距離を固定化してしまってさえいるのだ。彼らは、正統なスタイルがその正統性を多くの人々に使用されているという事実のみからえていると批判する時には関係論者でありえても、代替の正当性を主張するためには本質論者にならざるをえない。そのために生まれた実体論的な対立項は、サイードが『オリエンタリズム』で示したとおり、正統とされるスタイルを擁護する者にとっても容易に役立て得るも

のとなるだろう。そして、その典型をブルデューは「鷹揚さの戦略［stratégies de condescendance］」と名づけている。彼の引いた例によれば、フランスにおける下位言語の一つであるベアルン語の使用される地域で、フランス語に関して卓越性を保証されている市長（彼は教授資格をもっていた）は、市民に向かってベアルン語で話しかけることによって「ウケる」ことができたのである。[24] このことが示しているのは、あらゆる官僚制の下で正統な言語スタイルが社会的卓越化の手段であることはいまさら言うまでもないにしろ、正統なスタイルが本来流通しないはずの場面においても、それを隠喩化することによって卓越化に役立てることができるということである。つまり、この戦略は、場の内外を媒介する「中間的技芸［un art moyen］」として、境界を「否認」することで、逆に境界性からその利得を引き出すものなのである。そして、その時の利得は、ある資本を本来の場以外のところで活用できるという意味でも、また多数の場の資本を同時に活用できるという意味でも、正統なスタイルの本義的使用以上に役立つものとなるだろう。

ところで、ここで問題になったメジャーなものとマイナーなものを結びつけると同時に分割する二項対立は、先にも少し触れたように、様々なヘゲモニー闘争の中の言語実践を構成することでその闘争自体を構成しているものである。それゆえ、それはA／Bという二つの物自体の実体的対立にはもちろん、A／非Aという純粋概念の規約的対立にも還元することはできない。[25] 本論で批判し続けてきた前者の立場が、あらゆる差別を物の本性から説明することで永続させるイデオロギーでしかないことはすでに明らかである。しかし、後者についても、やはり二つの項を完全に分け切ってしまうという点では同様に問題をはらんでいるのだ。実際、農民であることと領主であることが、また女性であることと男性であることが無関係であるならば、そもそも闘争を思いつくことさえ不可能であっただろう。あるいは、労働者であることと資本家であることがA／非Aという規約でしかないのであれば、それはいつでも変更可能なものであっただろう。しかし、このような自由主義的幻想に抗して、労働者がその弱肉強食のダーウィニズムの虚偽性を暴き、革命であれ改革であれ、現実の固定された差異をまがりなりにも流動化しえたのは、彼らの立場が資本家という敵対者と不可分の関係を結んでいる事実を発見したことによるものだった。したがって、第一節で分析した価値形態ⅡからⅢへの飛躍の中に二重の《転倒》があることを我々が見いだしたように、規約的な対立は物自体にではないにしろ実践によって（それもとりわけ言語実践によって）相関的に根拠づけられることで現実のものとなっているのだ。また、このことから、社会集団の対立は言葉の対立と別個には存在しえないことがわかるだろう。

そして、さらに見落とされてならないのは、言葉と物の二重化された対立は互いが互いを支えあうものであるという主張が、その差別性を断罪するディスクールにさえあてはまることである。しかし、だからといって、差別を非難するディスクールにおいて差別語が使用されることをここでとやかく言おうというのではない。なぜなら、

言語場や文脈を考えずに言葉狩りをするのは、言語命名説の副産物でしかないのだから。そうではなく、問題なのは、マイナーな側を擁護するディスクールがしばしば本質論的であるために（さもなければ価値の転覆を正当化するものはなにもなくなってしまう）、常に党派性を疑われるものとなってしまうことなのだ。『ディスタンクション』において明らかにされたように、上品な趣味の卓越性が民衆的なものとの偏差から生み出されていることを見抜く者ほど、しばしば民衆の美学自体もカント的美学の転倒であることを見落としてしまうものなのである。対立の中でその価値の転倒を図る二つの集団は、《分割－像［di-vison］》に半面からだけ光を当てることによって、それをより堅固なものにしてしまうのだ。しかし、その一方で、この対立に「中立の立場で」介入する科学が、それが語られる言語場と利害関心に関連づけて問題にするのではなく、それをただ「記述する」だけであるならば、相対主義の仮面をかぶったイデオロギー操作に堕することになるだろう。社会実践における対立を存在様式の対立に還元する「記述主義」は、それが行為者の意識や態度と称するものと行為を結ぶとき特に本当らしく見える。しかしその時、ある利害関心を語る言葉自体が、それとは別のものでもありうる言語場において、それとは別のものでありうる利害関心から生み出されたものであることは忘れられてしまっているのだ。科学の場の言葉は、法や行政の言葉と同様に、異なる場に移入されると、その権威によって実詞［substantive］から実体［substance］を生み出す《任命［nomination］》を行うことができる。そしてそれが可能になるのは、これら純粋の規約主義が、言葉と物をまったく別のレベルにおくためなのである。

それゆえ、本質論と規約論、いずれの選択によっても社会的対立の弁証法的性格を捕らえることはできない。なぜなら、外的な審級の規定性を失った資本主義社会の中の諸対立においては、境界が押しつけから生まれた同意によって実現されることはまずありえないのだから。むしろ、これらの対立は、抵抗ないし押しつけのために行われる規定の本質論に支えられているだけではなく、形式的にはあくまで中立性を守ろうとする記述の規約論の抑圧の中で、「否認」の力をバネにしてその存在基盤を強化している。そして、この形式的な中立性は、それを欲する記述者の意図が疑いえない時にはそれがなおさら疑いえないものとなることも、その存在に根拠を与える一助となっている。社会的対立の《分割－像》は、言葉と物の二元論が支える（男／女、冷／暖、強／弱といった）ありとあらゆる相補的対立を利用する神話論理によって、多元的な利害をめぐる社会闘争を背景とした日常実践という儀礼において達成される。したがって、デュルケイムが「積極的儀礼」と呼んだこのミメティックな創造をつかさどる《象徴権力》の担い手には、経済や法律や、日常の文脈を視野に入れた広い意味での政治のディスクールとともに、科学のディスクールもその名を連ねているのだ。

むすびにかえて

本稿の前書きにおいては、情報と「主体」の間に再び亀裂を見いださねばならないという課題が提出されていた。これについて今までの展開から言えることは、ブルデューが、個人と社会という関係性を、歴史的に構成されたある場と、社会的に構成された身体のラングであるハビトゥスとの出会いに置き換えることでそれにブレーク・スルーを与えていることである。彼にとって、「社会」（というよりある資本の追求を可能にする場）と「主体」とはもはや全体と部分という配置を取ることはできず、どちらが根拠となることもなしに、とりわけ言語的な実践における距離化の運動によって互いを実体化することで支えあっている。つまり、ブルデューにおいて「主体」という指示対象は、場とハビトゥスという二つの構造の間で常に時間的、空間的に引き裂かれ続けることで、すでに分割されているがゆえにこれ以上分割できない個体［individu］として存在しているのだ。この極めて実践的な錯綜体を例示するため、彼のテクストの一節を引用してみよう。

バイリンガルな状況は、疑似実験的なやり方で、固有に言語的な資本や他の資本の分配構造における対話者間の関係との関連で採用された言語のヴァリエーションを（そして彼らの表現道具のヴァリエーションを）観察することを可能にする。かくして一九六三年にベアルンの村で観察された一連の相互作用においては、同じ一人の人物（小集落の住人である老婦人）が、ベアルンの別の大集落生まれの（それゆえより《都会的》で、ベアルン人を無視でき、かつ無視するふりのできる）村の若い商人には《方言化されたフランス語》で自己表現しながら、そのすぐ後で、部落出身で同年配の村の女性にはベアルン語で話をし、さらに、村の小役人には非常に《修正された》フランス語を使い、最後に、部落出身で同年配の村の道路工夫にベアルン語で語りかけていた。[26]

重層的決定を主張しながら経済という場の特権性を保持し続けたアルチュセールとは違い、ブルデューにとって、場のみならず身体においても、物自体の実体的対立A／B型の、あるいは純粋概念の規約的対立A／非A型の排外的「主体」がただ一つ成立することはない。第二節で述べたように、ディスクールの指示対象がそれ自体ひとつの構造効果としてしか刻印されず、関係への関係としてしか刻印されないならば、身体こそは、それが望ましいかどうかは別として、様々の場に固有の《分割ー像》と戯れることで錯綜的な「主体」群を再創造し続ける隠喩の支点なのである。

そしてこの、場とハビトゥスの戯れとしてのディスクールは、その場に固有の利害関心によって導かれている。しかも、この主張は「主体」がその利害関心を意識しているか否かにかかわらず妥当する。なぜなら、本稿において、意味を内包する物としてのディスクール観が否定された今となっては、利害関心は必ずディスクールに先

立つというものではなく、それが解釈される（＝それが生まれる）時に場の文脈に結びつけられることで後付けされうるものだからである。ならば、ディスクールは、それを語る「主体」の意識にかかわらず、必然的に場のサンクションを受ける存在であり、逆に言えば、そのサクションによって存在するものであると言えよう。しかしながら、それよりも一般的なことは、ディスクールがあらかじめ市場のサンクションを予期した上で生産されるという事態であろう。それゆえ、ブルデューにおいて、言語実践や文化実践における創造投企は資本の投下という意味で経済における投機のアナロジーで考えられている。しかし、このアナロジーを古典経済学的な主体の哲学で理解してはならない。そこにおいて、かろうじて主観的と呼ばれうるものは、平均的なチャンスである客観的環境（場）と暗黙のうちにこのチャンスを評価する性向である身体化された客観性（ハビトゥス）との出会いの産物である利益の期待だけなのである。つまり、この主観性は、意識の十全たる明証性の中にではなく、スポーツにおけるそれのように身体化されたゲーム感覚の中に住まうことで、その機会を逸することなく作動している。そして、文化的なゲームに投機＝投企する者は、それに参加する以上、ゲームの中だけでの真実である資本とその多寡によって彼に付与された位置づけを、それがたとえ満足の行かないものであったとしても肯定せざるをえない。その時、同時に未来の可能性もゲームの中で限定されざるをえないのである。

それゆえ、投機＝投企としてのディスクールには、先の引用に見られた通り、その場の文脈に対する言及が必ず伴っている。つまり、「語られた言語と、それを語る話者やそれに対応した能力の所有で定義された集団を通して、あらゆる社会構造は各々の相互作用の中に（そしてそれによってディスクールの中に）現示されている。[27]」そして、一般的等価を準備することであらゆる言語実践の投機＝投企を可能にする場の間には、求められる資本の定義に関する認知が異なる諸集団の対立として、科学の場や法の場、そして文学の場などを頂点とする多極的ヒエラルヒーが設けられている。これらの多極的ヒエラルヒーは、暗黙のうちに経済資本との距離にしたがった配置を取ることで、また自然科学と人文科学の対立に代表される言語資本の種差にしたがった配置を取ることで、社会空間を形作るものである。[28]ならば、ディスクールを分析対象とする時に、我々は、ゲマインシャフト的に閉じられた言語共同体を前提とするのではなく、この錯綜的にヒエラルヒー化された《言語市場》を前提とする必要があるだろう。言語市場における多元的な場のヒエラルヒーは、多元的なハビトゥスとあいまってディスクールに複雑な行路を描かせるが、無限のカオスに至ることはない。なぜなら、（科学を含めた）言語実践を導く利害関心が、その資本の再生産を可能にする条件である真／偽規範の自己同一化作用（というのも「商品」が一つの個体でなければその価値も一義的に決められないから）によって、常にディスクールの指示対象を一元化しようとねらっているからである。もちろん、それは完全な成功にいたることはないが、社会空間の中の諸集団の勢力関係にしたがって《分割―像》を形作り、（二

対であれ三対であれ）その対立が生み出す力の均衡の中に「社会」や「主体」を安定化している。それゆえ、逆に言えば、イデオロギーを虚偽意識の観点からしか考えない社会学が、この多元性を無限性と誤解し続ける限り、また、「真理」の名の下に現実の一元化をめざすものである限り、それは象徴権力の一つとして行為遂行的イデオロギーを行使し続けることになるだろう。こうした科学は、確かに言語を圧殺する勢力がすべての対立を物自体の対立と化すことに抵抗するには有効だが、言語に物を「反映」させることで概念の中に対立を結晶化する象徴権力に対しては無防備であり、時にその一翼を担うしまつに陥っている。それを避けるには、すべてを教室の文脈で脱利害化する「学者の相対主義」を放棄し、経済、法律、政治といった場と科学の場との距離を、また、それらの場を駆動する異なる利害関心を理解し、ディスクールをそれ固有の場においてその多元性を保ったまま分析しなければならない。科学の理論的な立場は、実践から距離を置き、ゲームから降りているからこそゲームのルールの恣意性を見抜くことができるのだが、そうした立場は、同時に、ルールが実践との弁証法において保証されていることを見逃してしまう。いいかえると、物自体としての絶対的差異を消去した上でなお、むしろ一つの概念図式の時空平面における共存を拒否することで物としての手ごたえを獲得しようとする実践の巧緻をそれは見逃してしまうのだ。したがって、（言語実践そのものを含めた）実践的な立場のディス・コミュニケーションを利用したコミュニケーションを知るには、時間的かつ空間的な距離化の運動の理解を理論的な立場に取り込まねばならない。それがなされて初めて、社会学は、社会的事実をそこにすでにあるものとしてではなく常に達成されるものとして示しうるだろうし、また複数の場を貫通する隠喩である「社会」や「主体」という《存在》を、その複数の顔を損なうことなく、かいま見させてくれるだろう。

注

（1）ミシェル・フーコー『作者とは何か？』（清水徹・豊崎光一訳）哲学書房、一九九〇、七〇頁。

（2）Terry Eagleton, *Ideology – An Introduction*, London: Verso, 1991, p.9.

（3）作田啓一「預言の自己成就（R・K・マートン）」、作田啓一・井上俊編『命題コレクション・社会学』、筑摩書房、一九八五、八四頁、所収。

（4）ここで、本稿における「実践」という用語に関して、それがマルクス主義の文脈において使用される“praxis”の訳語ではないことを断っておきたい。ブルデューが“praxis”の特に実存主義的な用法と決別するために慣習化され身体化された性向から生まれた投企である“pratique”を分析の対象にしていることは周知のことと思われるが、本稿における「実践」はすべて後者を念頭において使用されるものである。

（5）Jean-Joseph Goux, “Marx et l'inscription du Travail”, dans *Théorie d'ensemble*, Paris: Seuil, 1968, pp.188–211.

（6）ソシュール『一般言語学講義』（小林英夫訳）、岩波書店、一九四〇、一一四頁。

（7）カール・ポランニー「自己調整市場と擬制商品――労働、土地、貨幣」（玉野井芳郎訳）、『経済の文明史』、日本経済新聞社、一九七五、

二五頁、所収。

(8) マルクス『資本論』(大内兵衛・細川嘉六訳)、大月書店・マルクス＝エンゲルス全集二三・第一分冊、一九六五、六七頁。

(9) 竹内芳郎『言語・その解体と創造』、筑摩書房、一九七二。

(10) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』、岩波書店、一九八一、二二四頁。

(11) マックス・ブラック「隠喩」(尼ヶ崎彬訳)、佐々木健一編『創造のレトリック』、勁草書房、一九八五、一三頁、所収。

(12) 同論文、一五頁。

(13) 菅野盾樹『メタファーの記号論』、勁草書房、一九八五、一三二頁。

(14) Pierre Bourdieu, *Ce que parler veut dire — L'économie des échanges linguistiques*, Paris: Fayard, 1982, p.193.

(15) ポール・リクール『生きた隠喩』(久米博訳)、岩波現代選書、一九八四、三一九頁。(リクールはおいて)さらに言うと、詩的文脈においても、隠喩的表現を本義的表現から分離することはできない。なぜなら、隠喩は、コンテクストに違反するという必要条件があるために、皮肉にも、語られているコンテクストに依存しないことには味わえないものとなっているからである。ある隠喩が隠喩として作動するかどうかは特定の言語場で本義とされる統辞関係をそれが違反するかどうかにかかっているので、本義性の受容がなければ隠喩的表現も成立しない。

(16) ジョージ・レイコフとマーク・ジョンソン『レトリックと人生』(渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳)、大修館書店、一九八六、八八—八九頁。

(17) ショシャナ・フェルマン『語る身体のスキャンダル — ドン・ジュアンとオースティン・あるいは二言語による誘惑』(立川健二訳)、勁草書房、一九九一、九二頁。

(18) 例えば、ゲーリー・S・ベッカー『人的資本 — 教育を中心とした理論的、経験的分析』(佐野陽子訳)、東洋経済新報社、一九七六。

(19) 教育市場の統合が、経済資本からの言語資本や文化資本の自律化と不可分であることについては、フィリップ・アリエスの次の文章にその証拠を見いだすことができる。

「学校化以前の時代には(十九世紀におけるように)習俗の境界線が、民衆と上流階級との間にくっきりと引かれていることはなかった。互いに衣装を交換しでもすると、間違われる危険さえあった。そこから、物語りによくある下男が主人に扮装するという可能性がでてくるのである。…たしかに、この習俗の共同性は、社会的身分の平等をもたらしたわけではなかった。むしろ社会的身分の階層は、衣装や、尊敬の外的なしるしや、従属者のへりくだりのしるしなどによってきわだたされていた。…しかし、このように地位のしるしが重視されていたということは、まさにいっしょくたの日常生活や、同じような習俗のために、人びとの間の不平等がたえず疑わしいものとされており、それを常に維持し、再確認しなければならなかった、という事実によって説明されるのである。」

『〈教育〉の誕生』(中内敏夫・森田伸子編訳)、新評論、一九八三、一七四頁。

(20) Bourdieu, "The forms of Capital", in John Richardson.(ed.), *Handbook of Theory and Research for Sociology of Education*, New York: Greenwood Press, 1983, p.243.

(21) ブルデュー「文学生産と『場』の理論」(石井洋二郎訳)、加藤晴久編『ピエール・ブルデュー — 超領域の人間学』、藤原書店、一九九〇、一五七頁、所収。

(22) しかし、ここでも境界は絶対的な切断を意味しない。ブルデューが『ホモ・アカデミクス』の中で分析したように、文化資本の中でのヒエラルヒーも一つではなく、経済資本とのその距離に暗黙のうちに関係する様々な頂点をもっている。そして、ある文化的な場の資本の新たな定義は、経済と文化の多重化された闘争の中で他の場の資本が隠喩的に持ち込まれたものであるということがしばしばなのである。

(23) Pierre Bourdieu et Monique de Saint Martin, "Les catégories de

l'entendement professoral", *Actes de la recherche en Sciences Sociales*, no.3, mai, 1975, pp.68–93.
もちろん、レトリックの駆使が常に高い評価を受けるとは限らないし、実際、不適切な隠喩は低い評価を受けている。しかしその評価が低いのは、それが隠喩だからではなく、それが不適切だからである。

(24) Bourdieu, *Ce que parler veut dire*, pp.61–64.

(25) エルネスト・ラクラウとシャルタン・ムフ『ポスト・マルクス主義と政治 ― 根源的民主主義のために』(山崎カヲル・石崎武訳)、大村書店、一九九二、二〇三―二二九頁、参照。

(26) Bourdieu, *op.cit.*, pp.77–78.

(27) *ibid.*, p.60.

(28) Cf., P. Bourdieu, *Homo Academicus*, Les Éditions de Minuit, 1984.